「JGAゴルフジャーナル」SEP. 2021 Vol.109

JAPAN GOLF ASSOCIATION

JGA Golf Journal

写真提供：IGF

JGA 公益財団法人 日本ゴルフ協会

スポーツくじ BIG
スポーツ振興くじ助成事業

松山が銅メダルプレーオフで敗れ 惜しくもメダルを逃す。星野は38位タイ

開催日　2021年7月29日（木）～8月1日（日）
開催コース　霞ヶ関カンツリー倶楽部東コース（7,447ヤード、パー71）

1最終組でラウンドする松山英樹（左）とザンダー・シャウフェレ（右）
2力強いショットを放つ松山
3 38位Tで終えた星野陸也
4最終組の3選手。左からシャウフェレ、松山、ポール・ケーシー
5コースの攻め方を確認する星野
6プレーオフに惜しくも敗れた松山
7表彰台に立つ金のシャウフェレ（中央）、銀のロリー・サバティーニ（右）、銅のC・T・パン（左）
8ボランティアやスタッフが一丸となり大会を支えた

35の国と地域から60選手が参加して72ホール・ストロークプレーが行われた。

松山英樹は第1ラウンドを2アンダーパー、69で首位から6打差の20位タイ発進。星野陸也はパープレーの71で41位タイにつけた。第2ラウンドは悪天候による中断があり16選手がプレーを終了できなかった。松山は16ホールで6バーディを奪い、通算10アンダーパーで暫定3位タイに浮上。68でホールアウトした星野は通算3アンダーパーで暫定25位タイとなった。

第2ラウンド残りと第3ラウンドが行われた3日目、松山は20ホールを6バーディ、1ボギーで回り通算13アンダーパーに伸ばした。首位のザンダー・シャウフェレ（アメリカ）とはわずか1打差の単独2位。金メダル獲得が現実味を帯びてきた。星野は73と苦戦し、46位タイに後退した。

最終ラウンド、序盤は足踏みして差を広げられた松山だったが中盤から巻き返し、14番で首位との差をスタート時と同じ1打差にまで戻した。だが、終盤はチャンスでパッティングを決めきれず通算15アンダーパーの3位タイでホールアウト。7人による銅メダルプレーオフは1ホール目で脱落して4位タイに終わった。金メダルは通算18アンダーパーのシャウフェレ、銀メダルは61と猛追したロリー・サバティーニ（スロバキア）が獲得した。銅メダルプレーオフを勝ち抜いたのはC・T・パン（チャイニーズ・タイペイ）。星野は66で回り、38位タイで競技を終えた。

男子成績

順位	SCORE	選手名	1R	2R	3R	4R	合計
1	-18	Xander Schauffele	68	63	68	67	266
2	-17	Rory Sabbatini	69	67	70	61	267
3	-15	C.T. Pan	74	66	66	63	269
:							
4T	-15	松山 英樹	69	64	67	69	269
38T	-6	星野 陸也	71	68	73	66	278

写真提供：IGF

日本ゴルフ界史上初の快挙!
稲見が銀メダル獲得。畑岡は9位タイ

開催日　2021年8月4日（水）～7日（土）
開催コース　霞ヶ関カンツリー倶楽部東コース（6,648ヤード、パー71）

1 表彰台に並ぶ金のネリー・コルダ（中央）、銀の稲見萌寧（左）、銅のリディア・コ（右）
2 最終日12番からの4連続バーディで2位に浮上した稲見
3 最終組のリディア・コとアディティ・アショク
4 稲見は正確なティーショットでフェアウェイキープ率1位となった
5 世界ランク1位のコルダが金メダルを獲得
6 銀メダルを懸けたコと稲見のプレーオフ
7 9位Tでフィニッシュした畑岡奈紗
8 慎重にグリーンのラインをよむ畑岡
9 10番ホール。池越えのパー3

男子同様、35の国と地域から60選手が参加して72ホール・ストロークプレーが行われた。

日本代表の畑岡奈紗と稲見萌寧は第1ラウンド、ともに1アンダーパー、71で回り首位から4打差の16位タイ発進となった。第2ラウンドは稲見が6番（パー4）でイーグルを奪うなど65をマーク。通算7アンダーパーの6位タイに浮上した。畑岡は68で回り、通算4アンダーパーの11位タイ。ネリー・コルダ（アメリカ）が通算13アンダーパーとして4打差の首位に立った。第3ラウンド、稲見が順調にバーディを重ねて通算10アンダーパーの3位タイでホールアウト。首位のコルダとは5打差ながら金メダルも狙える位置につけた。畑岡も通算8アンダーパーの7位タイに浮上し、メダルのチャンスが出てきた。

最終ラウンド、最終組の1組前でプレーした稲見は前半を4バーディ、2ボギーで折り返す。後半に入ると12番から4連続バーディ。一気に金メダル争いに加わってきた。雷雲接近で競技は一時中断。再開直後の17番で約4mのバーディパットを沈めてついに首位コルダに並んだ。しかし18番は2打目をバンカーに入れてボギー。最終組のコルダが18番でパーセーブして金メダルを確定させ、稲見は通算17アンダーパーの2位タイで並んだリディア・コ（ニュージーランド）とのプレーオフへ突入する。そして1ホール目でコを下して銀メダルを獲得。日本ゴルフ界で初めてオリンピックの表彰台に上った。畑岡はフィリピン代表で出場した笹生優花らと並ぶ9位タイに終わった。

女子成績

順位	SCORE	選手名	1R	2R	3R	4R	合計
1	-17	Nelly Korda	67	62	69	69	267
2	-16	稲見 萌寧	70	65	68	65	268
3	-16	Lydia Ko	70	67	66	65	268
4	-15	Aditi Ashok	67	66	68	68	269
5T	-13	Hannah Green	71	65	67	68	271
5T	-13	Emily Kristine Pedersen	70	63	70	68	271
：							
9T	-10	畑岡 奈紗	70	68	67	69	274
9T	-10	笹生 優花	74	68	67	65	274

写真提供：IGF

東京2020オリンピックゴルフ競技における

JGAのサポート体制

万全の感染対策と周到な準備が日本代表選手のパフォーマンスを引き出した

開幕前に霞ヶ関カンツリー倶楽部で練習ラウンドを行う日本選手団

好成績を収めた東京2020オリンピックゴルフ競技。それを陰で支えたのはJGA強化チームの献身的なサポートだった。新型コロナウイルス感染拡大という前例のない事態の中で、どのように選手をウイルスから守り、パフォーマンスを引き出したのか。

独自の宿泊施設とルールを設けて「完全バブル化」を実現

日本ゴルフ界が初めて迎えた自国開催のオリンピック。日本代表選手に持てるパフォーマンスを発揮してもらうためにさまざまな環境を整えていくのがJGA強化チームの使命だった。

その中でも最も腐心したのは感染対策だった。

当初、日本代表選手は埼玉県内の組織委員会が承認したホテルに宿泊する予定だった。選手を外部と接触させない「バブル方式」と呼ばれる感染対策は講じられていたが事前の視察などで万全ではないと判断。万が一にでも選手が感染すれば、それはすなわち出場できなくなるということ。選手の感染リスクを徹底して排除するため独自の宿泊施設を会場近くに設ける決断を下した。

正式に決まったのは6月23日の強化委員会。開会式のちょうど1カ月前だった。

「強化委員会で“公式ホテルには泊まらず、我々独自の厳しいルールをつくって感染対策をしよう”とみなさんに腹をくくっていただきました」と話すのは陣頭指揮を執ったJGA競技者育成強化本部内田愛次郎部長。開幕が迫った時期での方向転換だったが、すでにかねてからこうなることを想定して宿泊施設の目星はつけており、会場近隣で高齢者向けマンションの一部や一軒家など3カ所を押さえることができた。

会場まで10分ほどの高齢者向けマンションでは入居者と絶対に接触することがないよう導線を確保。ここではダイニングルーム内の共有スペースを本部として活用したほか、選手に提供する食事をつくるなど、拠点として重要な役割を果たした。また、このマンションの付帯施設であるジムも外部の人間と交わることなく使用できることになり、選手のコンディション維持に役立った。

選手団と接するスタッフらはワクチン接種済みの者に限定。さらに期間中は定期的にPCR検査を行い、万全を期した。宿泊施設と会場間はスタッフが車で輸送。会場以外で選手が一切外部の人間と接触しない「完全バブル」をつくり上げ、組織委員会の承諾もいただいた。

練習場所は霞ヶ関カンツリー倶楽部に隣接する東京ゴルフ倶楽部の協力を仰いだ。霞ヶ関カンツリー倶楽部は開会式翌日からでないと使用できないなどの制限があったため、選手が存分に練習できる環境を確保したのだ。ここでも一般プレーヤーと別の導線を設けるなどの感染対策を施し、組織委員会へ活動施設として登録した。

レジストレーション・IGFインフォメーションカウンター

クラブハウス入口にて、抗原検査を実施

凍らせたスポーツ飲料を摂取して体の内部から体温を下げた

アイスベストを着用する稲見（左）。オーストラリア代表も類似のアイテムを使用（右）

アイスバスに入って体温を下げる畑岡

スポーツ科学を駆使した暑熱対策で選手のパフォーマンス維持を実現

パフォーマンス面のサポートも重要だった。

まずは暑熱対策。猛暑の中でもパフォーマンスを維持するため、数々のアイテムを導入したのだ。

そのひとつがアイスベスト。保冷材が入ったアイスベストを着ることで、炎天下でほてった体の表面の温度を下げることができるアイテムだ。プレー中は保冷材を十分に冷やすためスタッフがドライアイスの入ったクーラーボックスを持って帯同。必要なところで選手に冷えたアイスベストを着てもらった。

体の内部から体温を下げるために凍らせて摂取するスポーツ飲料も採用。体に蓄積された熱を放出するためにアイスバスも準備し、選手は宿舎に戻るとまずアイスバスに全身または足のみを浸して体温を下げ、体調維持に努めた。

食事にも気を配った。栄養サポートスタッフが各選手の好みと栄養バランスを考慮した献立をつくり、拠点で選手に提供した。

ゴルフが112年ぶりにオリンピックに復帰した前回のリオデジャネイロ大会では、日本は女子が野村敏京の4位タイ、男子は池田勇太の21位タイが最高成績だった。今回はそれを上回り、女子では稲見が銀メダルを獲得するなど自国開催の責任は果たしたといえるだろう。

サポートする側からすれば自国開催の利はあった。「ホームですからスタッフが十分に活動できましたし、ドライアイスなどの調達も容易にできたのは確かです」（内田部長）。

加えて、前回の経験も生かした周到な準備があったことは見逃せない。内田部長は「事前調査でどのようなアイテムが暑熱対策に効果的なのかを把握していました。五輪種目に復帰してから、JOCとJSC(スポーツ振興センター)との関係もより密になり、様々なスポーツ医科学情報を得る環境になりました。そのような経緯もあり、今大会では、リオデジャネイロ大会の時より、他の五輪種目と同レベルのスポーツ科学を活用できたと思います」と証言する。

そして「コロナ禍と猛暑という厳しい状況の中でいかに選手にパフォーマンスを下げることなくプレーしてもらえるかというところに神経を使いました」と総括。選手のことを第一に考えたスタッフの献身的なサポートが日本代表の好成績を下支えしていた。

JGA 定款変更

普及と振興を旗印に ゴルファー増加と ゴルフ界活性化を目指す。

JGA定款変更についてインタビューに答える山中専務理事

――まず定款変更に至った経緯をお話しください。

山中　JGAは何をする団体なのかと問われた時、多くの方はアマチュアのゴルフ競技団体というイメージを持つと思います。実際、これまで定款の第2章第4条（事業）の最初には「全国的各種選手権及び競技の開催又は後援」が掲げられ、競技を中心に規則、ハンディキャップや選手強化を行なって来ました。一方、日本ゴルフ協会は、日本のゴルフの統括団体と位置付けられています。外部から見た時、ゴルフと言う競技の普及振興も、期待される重要な機能です。確かに競技は大切ですし、規則、ハンディキャップや選手強化は広い意味でゴルフの普及振興につながるものです。ただ、これらの対象になるゴルファーは果たして全体のどれくらいの割合でいるのか、という現実もありました。ゴルフは裾野の広いスポーツです。人口が減っている日本において、ゴルフをする多くの人がいなければ、競技にばかり力を入れても仕方ないのではないか。何十年先もゴルフというスポーツがきちんと存在し、成長していくためにはゴルファーの数を増やすこと、あるいはゴルフをしやすい環境をつくり、ゴルフのイメージアップを図ることこそがJGAのすべき仕事ではないか。そういうことがここ数年、議論されてきた経緯があります。

昨年秋、JGA正会員である加盟クラブを対象に「JGA、地区連盟の機能役割に関するアンケート」を実施しました。JGAに期待することで回答が集中したのは「新規ゴルファーの創出」「既存ゴルファーの活性化」「ゴルフを取り巻く環境整備」の3つ。我々が想像していたことと一致しました。やはりJGAは周囲が望んでいることをやっていくべき。そのために、まずは看板である定款にそのことを謳い、みなさんにJGAというのはこういう団体ですと知っていただくことから始めようということになりました。

ゴルフ規則は世界共通。英国スコットランドのR&Aルールズリミテッドと全米ゴルフ協会（USGA）が共同で制定しています。JGAからもアドバイザリーメンバーを派遣し、4年に1度改訂される規則への提案などを行っています。JGAでは、そのゴルフ規則を翻訳し、日本語版の「ゴルフ規則書」と「ゴルフ規則裁定集」を発行しています。

ジュニアゴルファーにゴルフ場を開放する我孫子ゴルフ倶楽部

――第2章第3条（目的）に「ゴルフの健全な普及と振興を図り」という新しい文言が入りました。

山中　はい。もともと同じような文言は入っていましたが、より強調したわけです。JGAの事業はすべて普及と振興にひもづく形でやるんですよ、と。だからこそ我々は公益財団法人を名乗れるわけで、統轄団体として日本のゴルフ界を引っ張っていく立場にあるということを一層明確にしたかったのです。

――第4条（事業）には新しい項目が2つ加わっていますね。

山中　「ゴルフの普及と振興に関する活動の実施」と「ゴルフ界を取り巻く環境整備、改善のための活動」という2項目です。前者は第4条の12項目中1番目に掲載しました。今までは1番目が競技で2番目が規則、それからハンディキャップや選手強化などがあって、定款に則っているという意味ではこれまでやってきたことは間違いではないのです。でも、ここは普及と振興をきちんと最初に掲載しましょう。その方法論として競技や規則、ハンディキャップなどがあるという考え方にしましょうということです。

ジュニア育成事業の一環として開催される小学生ゴルフ大会

――JGAは公益財団法人ですから定款の変更は簡単ではないと思います。そのあたりはいかがでしたか。

山中　まずは理事会の承認が必要です。昨年12月の理事会で基本的な考え方と3月の理事会で正式な変更案を提出することを了承していただきました。また、我々は定款にある目的事業を基に公益認定を受けているわけですから、そこを変更する理由を巡って内閣府公益認定等委員会と何度もやりとりがありました。想像はしていましたが、結構時間のかかる作業でしたね。何とか3月の理事会に間に合い、承認をいただいて4月1日から変更したという流れです。

――普及と振興を推し進める上での具体的な動きはどのように考えていますか。

山中　今、ゴルフ界にはさまざまな団体があり、それぞれがいろんな活動をしていますが、ゴルフ界としてまとめきれていないのが現状です。このままではゴルフ界がまとまっての普及振興は難しい。JGAには統轄団体としてゴルフ界をまとめる骨組みをつくり、旗を振って正しいことを発信していくことが最も求められていることだと考えています。そのための本部をつくろうと、今年度の事業計画にも「ゴルフ振興推進本部（仮称）」の設置に向けた制度設計を各地区連盟やゴルフ関連団体とともに行うことを盛り込んでいます。第4条に加えた「ゴルフ界を取り巻く環境整備、改善のための活動」という項目は、まさにこのことなのです。

ジュニア育成を例に挙げれば、国内にはジュニアの団体がいくつかあり、プロ団体も独自に手掛けています。「ゴルフ振興推進本部（仮称）」の大切な役割は、これらの活動をうまくまとめ、お金もアイデアも、そして人材も集結させて、効果を最大化することです。地区連盟を含め、ゴルフ界全体で取り組んでこそ、実現できるものだと考えています。

2020年日本オープン最終予選を開催された
小野東洋ゴルフ倶楽部

――普及振興を考えた時、まだ少ない女性ゴルファーをどう増やしていくかがひとつのポイントになるかと思います。

山中　女性ゴルファーの割合はこれまで全体の10%程度とされていましたが、最近は18～19%にまで上がっています。細かい分析はこれからですが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、屋外でできるゴルフを始めた方が増えた可能性はあると思います。女性ゴルファーの取り込みは大きなプロジェクトのひとつ。委員全員が女性のJGA女子委員会でも現在は女性ゴルファーを増やすことを一番重要なミッションとして取り組んでもらっています。やはり女性ゴルファーを増やすには女性目線が不可欠ですから。

――新型コロナウイルスの話が出ましたが、女性を含めた20代、30代の若者がゴルフを始めるケースが増えているようです。喜ばしい一方でゴルフに慣れていないがために既存のゴルファーとのあつれきも度々、見聞きします。

山中　確かに、練習場でもゴルフ場でも始めたばかりという方が増えています。かつては先輩ゴルファーに交じってコースデビューするのが当たり前でしたが、最近は初心者だけのグループが目立つようです。だからゴルフ場でやるべきこと、やってはいけないことが分からないままコースに出ている状況だと思います。

――ベテランゴルファーからすれば「何だあいつら、マナーがなってない!」となってしまいます。

山中　お互いが気持ちよくプレーするには最低限のマナーを知ってもらうことが必要。初心者向けにゴルフ場や練習場ではどう行動すればいいのかという動画を作ってHP上で見れるようにすることを今、検討しています。ゴルフを始めたばかりの若者に、いかに続けてもらうかはゴルフ界にとって大事な問題です。

――高齢のゴルファーに長くゴルフを続けてもらうことも必要ですね。

山中　高齢化社会になっている今、ゴルフが社会に貢献できるエリアはすごく広いと思っています。具体的に言うと認知症予防や老化防止の効果があり、友達を増やすことによって孤立から守るということもあります。ゴルフと健康というテーマはR&Aも力を入れていますし、JGAでも普及振興活動においてひとつのキーになると思っています。ゴルフによって健康寿命が延びれば、国の医療費削減にも貢献できますし。。。

――普及振興活動の中には文化的なものもあっていいかと思いますが、いかがでしょう。

山中　おっしゃる通りです。たとえばゴルフの殿堂についてもそのひとつだと思います。現在、JGAのミュージアムがあり、一方で日本プロゴルフ殿堂がありますが、日本のゴルフを正しく後世にのこしていくためには、プロ、アマチュアの垣根をなくし、ひとつの殿堂とすることが理想だと思っています。

――ジュニアゴルファーが文化としてのゴルフを学べる環境を整えていくことも必要ではないでしょうか。

山中　自分がやっているスポーツにはどういう歴史があって今につながっているのか、どんな人たちが発展に尽力してきたのかということを知るのはとても大切です。アメリカの子供たちはそういうこともよく学んでいるように思います。それがプロになってからのスピーチやインタビューの受け答えにも表れていると感じます。日本でもゴルフ文化を学べる土台をつくっていかなきゃいけない。素晴らしいスピーチやインタビューは自分自身のアピールだけでなくゴルフ界全体のイメージアップ、ひいては普及振興にもつながっていくと思っています。

――普及振興活動を大々的に進めていくには莫大な費用もかかると思います。

山中　確かに、きれいごとだけでは物事は動かせません。財源をどうやってつくっていくかというのは大きな問題ですが、その一方でお金をかけなくても出来ることもたくさんあると感じています。

――JGAの主な収入のひとつに加盟クラブからの会費がありますね。

山中　はい、その通りです。ただし過去の経緯はともかくとして、公益財団法人であることを考えれば、JGAの会員は本来個人ゴルファーが中心であるべきだと思っています。そのうえでゴルファーから得た収入や寄付でゴルフを正しく普及振興させて社会に貢献していくのが正しい設計図ですが、そうなっていないのが現状。いずれはゴルフ界の設計図を変えていかなきゃいけないのではと思っています。

――何か具体的な案はありますか?

山中　たとえばゴルフ場利用税の在り方があります。今までは完全撤廃に向けて活動してきましたが、ゴルフ場利用税は地方自治体にとっては重要な財源。ましてコロナ禍で国も地方も財政がひっ迫していく中で完全撤廃を叫ぶのは現実的ではありません。一方、地方自治体にとってはゴルファーが減ればそれだけ税収は減るわけで、それは避けたいはずです。ゴルファーを増やすための取り組みは我々ゴルフ界の仕事。例えば現在年間約430億円（2019年実績）あるゴルフ場利用税の一部をゴルフの普及振興に使うことができればゴルファー増加につながり、税収も上がり、地方の経済も潤うはずです。お互いのためになるように、完全撤廃ではなくこれからはゴルフ場利用税のあり方を検討していきましょうという考えです。まだアイデアの段階ですし、簡単に実現できるものではありません。時間もかかるでしょう。ですが、しっかりした理念を持ち、みなさんが納得できる形を考えていくことが必要。それも今回の定款変更の中の事業目的の一つなのです。

旗振り役となり、ゴルフ界活性化に努めると山中専務理事

――JGAには旗振り役としての存在意義も問われると思いますが、いかがでしょう。

山中　まずは我々JGAがみなさんから必要だと思われる存在にならなければいけません。JGAは職員20数人しかいませんし、収入も支出も年間20億円程度。現状のままではできることは限られていますが、その中で、まずはやれることをしっかりとやっていきたい。私を含め役員、委員、職員全員がゴルフ界のために何ができるかを考え、仕事に取り組む。そういうことを積み重ねていければみなさんに認めていただき、協力していただける団体になっていくと思います。

――そうすることでゴルフ界全体のチームワークが良くなっていきますね。

山中　各地区連盟や関連団体とも意識を共有し、JGAがやるべきこと、各地区連盟や団体にお願いすることをきちんと棲み分けをしていきたい。そのためにもコミュニケーションを密にしていきたいと思っています。繰り返しになりますが、JGAが今後、向き合っていかなかればいけないのは個々のゴルファーであり、それこそが日本のゴルフ界の発展につながり、結果的にゴルファー一人一人やゴルフ場、そしてゴルフ界全体に還元できると考えています。

日本人選手
マスターズ挑戦33人目の快挙

Hideki Matsuyama 松山 英樹

提供：オーガスタナショナルGC

Choi again had chan
Matsuyama earns amateur accolade
Palmer energized by roars for T

2011年マスターズでの日本人アマチュア選手の活躍は地元紙でも大きく取り上げられた

松山英樹が、日本人選手として、いやアジア人選手としてマスターズに初優勝した。日本のゴルフ史上初のマスターズ優勝は、日本ならず世界でも印象的なシーンとして刻まれている。

2010年、霞ヶ関カンツリー倶楽部で開催されたアジア・パシフィックアマチュア選手権に優勝して、アマチュア日本選手として初のマスターズ出場権を得た。そして2011年マスターズ。松山英樹は見事にローアマチュアに輝いた。日本人選手が、いつかきっとグリーンジャケットに袖を通す姿が、見られるかも知れないという希望に変わった瞬間だった。

「あの10年前がなければ、いまの僕はなかったと思う」と松山は言った。そして、こう続けた。

「この10年が、僕にとって短かったか長かったかわかりませんけれど……」と語った。

その言葉に、この10年間の松山の努力と苦悩、そして勝ちたいという目標とそのための日々が詰まっていたに違いない。

「努力……いや、僕はただひたすら上手くなりたい、勝ちたい、ゴルフが好きで、そのためにやってきたので、努力とは思いません」と言う。

アマチュア時代、松山の体格は、痩せ型の部類に入るほどだった。2度目のマスターズを終えて、プロ入りを果たす直前、彼の体格は見違えるほど変わっていた。大きく張った肩から胸、どっしりとした下半身は、並大抵なトレーニングでは手に入れられないものとひと目で分かった。プロ転向をし、USツアーに主戦場を移して以降も、トレーナーとの二人三脚で肉体改造に取り組み続けた松山の姿は、USツアーメンバーの中にいて、遜色がない。そして、ここまで陰日向となってきたチーム松山に、技術面からサポートする目澤秀徳コーチが入ったことで、その歯車にベストの潤滑油となって加速した。

「いままでは、自分でいろいろ考えて、自分で悩み、果たしていい方向に向かっているのか、そうでないのかって迷うことがあったけれど（コーチがいることで）いまは、正しかったんだ。そうなんだと思えて、迷うことも悩むこともなくなりました。これでいいんだと。マスターズ前週の試合で、初日にうまく行っていたものが、2日目から悪くなり、怒りが爆発しました。そのときに、俺は、何をやっているんだ、と思ったんです」

マスターズで、いままで以上に笑顔を見せたのは、そんな自分に対する反省でもあった。ゴルフは、メンタルなスポーツでもある。

2021年マスターズ最終日。18番ホールの第1打を打ったときに、勝てると思ったという。「1番のティグランドに立つまでは、別に緊張感ってなかったんですが、立った途端に、緊張しました。それからずっと18ホール、緊張の連続でした」と言う松山だけれど、外側から見れば、堂々とした態度、いつもと変わらない姿勢のゴルフに見えたのは、誰よりも練習し、鍛錬してきた自信の表れだったと思う。

「才能は、有限。努力は無限」というのは松山が少年時代に書いた座右の銘だ。

日本人選手の参加は、1936年第3回大会だった。戸田藤一郎と陳清水の2人である。もっとも記録によると、実はその前年にも招待状が日本人3選手に対して届いていた。

浅見緑蔵、宮本留吉、中村兼吉の3選手だが、彼らは出場を断念した。なぜなら、招待状が届いたのが2月末。彼ら3人は、すでにいくつかの米国の試合に出場を予定していた。その出発が4月上旬と決定しており、スケジュールを気軽に変更できない時代だったのである。

当時の旅の主役は船である。戸田と陳は、その前年(1935年)の12月10日に横浜港を出発している。公的な資金援助が少なかったため安い運賃の貨客船宇洋丸で出発したと記録にある。今なら9時間ほどで着いてしまうロサンゼルスまで16日間の船旅だった。2人は、そこから10数試合のウインター・ツアーに参加している。

日本でマスターズという大会が広く注目されたのは、河野高明が2度目の出場で12位となってからだった。そして1973年大会で尾崎将司が8位タイになったことだった。実は、それ以前にも、陳清波が15位（1963年）、河野高明が12位（1970年）と活躍していたのだが、ベスト10には届かなかった。生中継が1976年から始まって、マスターズは世界の4大メジャーの中でも格別な関心度を高めた。

その後も、中嶋常幸が8位（1986年）。さらに伊澤利光が2001年に、片山晋呉が2009年に4位となっている。

長い間、日本人選手にとっては、グリーンジャケットは高嶺の花だった。どうしても超えられない壁があった。

「届きそうで届かない。ものすごく遠い先にある。それがマスターズに勝てないことなんだ」と尾崎が言ったことがある。松山は、その見果てぬ夢を現実のものとした。

空港まで帰路についていたケビン・ナは、わざわざ松山の優勝が決まるかも知れないと、コースに戻ってきて祝福した。

松山も、溢れる涙を堪えきれずに、泣いた。日本中のゴルフファンも、感涙した。実に、日本人選手33人目の快挙だった。

松山英樹より一足早く

オーガスタナショナルを制した梶谷翼

アジア人初の快挙を成し遂げた梶谷翼とオーガスタナショナルのフレッド・リドリー会長

提供：オーガスタナショナルGC

マスターズトーナメントよりも一足早くオーガスタからビッグニュースが飛び込んできた。同トーナメントと同じ舞台で行われた第2回オーガスタナショナル女子アマチュア選手権での梶谷翼の優勝である。それは、松山英樹がマスターズを初制覇する8日前のことだった。

日本から上野菜々子とともに出場した梶谷。プレーオフを制しての優勝であった。第1回大会では、安田祐香が3位になっていた。コロナ禍で第2回大会は2年越しの開催を余儀なくされていた。上位30人がオーガスタナショナルのステージに立てる。梶谷は上位で“聖地”での決勝ラウンドに臨んだ。このときの心境を、こう語っていた。「このコースでプレーできることは幸せだし、とても光栄だと思っていました。緊張はするでしょうけど、何があっても楽しもう。そう心に決めていました」

最終ラウンド、アーメンコーナーを無事に通過し、パー5の15番ホールでバーディを決めた。16番（パー3）をパーにした時点で、通算1アンダーパーで単独トップに立っていた。迎えた17番で思わぬ乱れがでた。第2打をグリーン手前にショートさせると、そこからのアプローチショットを寄せきれず、さらに3パットのダブルボギーにしてしまった。18番（パー4）でもティーショットがバンカーにつかまり、そこからフェアウェイに前進させるだけにとどまった。ピンチの連続から、第3打ではクラッチショットを決めた。ピン奥の斜面を利用したカップに戻すルートを積極的にやり遂げて、あわやカップイン…。みごとにパーセーブしたことで、先に1オーバーパーでホールアウトしていたエミリア・ミリアッチオ（米国）と並び、プレーオフに持ち込んだ。そして、1ホール目をパーとして、4オンのミリアッチオをくだしての優勝を手にしたのだった。

プレーオフが決まった瞬間の心境を、後にこう明かした。「他の選手たちよりも、数ホール多く経験できる。ありがたいな…と、そんな風に受け止めていました」。強心臓というか、度胸満点というか…。

滝川第二高校1年生のとき、日本ジュニア選手権（15-17歳の部）で優勝、さらに日本女子オープンでは全体の9位に入りローアマチュアとなり、その名が知られるようになっていた。昨年12月には左足首のじん帯を痛め、1か月間クラブを握れなかったというアクシデントに見舞われたが、それも乗り越えてのオーガスタナショナル女子アマ優勝。タイガー・ウッズからもインスタグラムを通して祝福された。

オーガスタナショナルで得たのは、栄光だけではなかった。「もっと飛距離を伸ばさなければいけない。アイアンショットも、もっとスピン量を増やして高弾道のショットを打てるようにしなければいけない」とこれから世界に羽ばたくために必要な課題も与えられた。オーガスタのヒロインは、さらに大きく、高く羽ばたこうとしている。